

# 『赤と黒』に就いて

金子守

## 第一章 作品の成立

此の小説の初版に読まれる巻頭の覚書で、Stendhalはこの作品が1827年に創作されたのであるから、1830年の事件、即ち、7月革命に関する如何なる示唆も含まれていないと、断言している。しかし、これは勿論 Stendhal の韜晦であって、かかる断言にも拘らず次の頁で〈1830年の年代記〉という副題を書きこまざるを得なかった。事実、小説の第二部に描写されている幾つかの事件がそれを証拠だてている。だが、此の小説の成立に決定的〈source〉を提供したのは周知の如く Antoine Berthet の犯罪であった。第二章でこの事件の詳細に就いては触れたいと考えるが、Stendhal の出身県でもあるイゼール県のブラングで、Antoine Berthetが傷害事件を起したが、此の事件の梗概を Stendhal は作品構成上の骨組とした。此の Berthet の犯罪を作家は『Gazette des Tribunaux』を読み知ったという。Stendhalはこの新聞の定期愛読者であったのである。1827年の12月の28、29、30、及び、31の諸号に Berthet の犯罪は読まれた。此の事実は Stendhal が小説を1827年に創作したと称しているのを否定できよう。さらに、彼は1827年に『Promenades dans Rome』を決定稿にするために励んでいたが、その頃、問題の Berthet 事件とは別の犯罪を『Gazette det Tribunaux』で読んでいるのである。すなわち、それは Laffargue の訴訟記録である。彼はオート・ピレネー地方のバアニエルで恋人を殺害し、5年の牢獄生活を送った後、1829年3月21日に死刑を執行された。此の事件を作家は『Promenades dans Rome』

のために利用した。従って、若し Stendhal が Berthet 事件を知っていたならば Laffargue と Berthet の名を並記したであろうと、推測される。要するに作家は『Le Rouge et le Noir』を1827年に創作しているどころか、プランさえも持ち合せていなかった。と断言できよう。では Colomb が認めた〈Julien〉なる草稿を作家は何時創作したのであろうか。以下、Henri Martineau の研究に基いて創作時期を明白にしたいと思う。先述した『Promenades dans Rome』の一冊に Stendhal 自身が記した覚書から〈Julien〉の発想がマルセーユ滞在中の1828年の10月25日の夜にあったと、Henri Martineau は述べて、同じく『Lucien Leuwen』の原稿に次の文を記していると指摘している。

《A Marseille, en 1828, je crois, je fis trop court le manuscrit du Rouge.》—〔1〕

また、Stendhal は『Une Position social』のプランを練りつつ次の如く記した。

《Arranger cette histoire comme j'arrangerai Julien à Marseille.》—〔2〕

さらに1837年の6月に Stendhal はナントで仕事をしているが、その際も次の回想をしている。

《Nantes, j'espère, me sera Marseille for the Rouge.》—〔3〕

作家自身の幾度かの証言によって作品の発想をマルセーユで得ていると看做してよいであろう。しかし、年月日に就いては Martineau によると、28年というのは作家の記憶違いで29年のことであると訂正している。Stendhal が南フランスの旅行から帰ったのは1829年12月2日である。その日に Colomb は従兄の〈Julien〉と太字で題された原稿を見たと言っている。Martineau はこれを証拠として上述の推測をしている。私も彼の推定を正しいと思う。その理由は28年と29年に及ぶ一年のあいだに作家が Berthet 事件が掲載されている『Gazette des Tribunaux』を充分に読む機会があった。と、考察され

るからである。此の作品の第二部のヒロインである Matilde の人間像形成からも創作の過程を解く鍵がある。南フランス旅行から作者が小説の第一部、すなわち、まだ〈Julien〉と題していた原稿を携帯して帰ったと思われるが、それには第二部が欠けていたようである。此の旅行は Stendhal が Rubempré 夫人の愛を取り戻す目的からであったとされているが、消えた灰に火は再びともらなかった。夫人は作家を彼の友人 Mareste と代えたのである。だが彼が深刻に悩んだ様子はない。むしろ、失恋が彼に執っては幸運をもたらしたと言えよう。Stendhal は女性の愛を獲得することを幸福符と称していたが、今回は向うから獲物とはび込んできた。30年1月21日に彼は Julia〔注1〕の恋の仕草に驚かされる。当時を追憶して『Vie de Henri Brulard』に次の如く告白している。

— «J'étais devenu parfaitement heureux, c'est trop dire mais enfin fort passablement heureux, en 1830, quand j'écrivais *Le Rouge et le Noir*.»—  
〔4〕

此の回想は作品を創作している作家としての幸福を表現していることは言うまでもないが、彼は Julie の愛を得て Matilde と Julien との愛を描写する確信のみならず作家として創作に必要な真摯性を得たのである。つまり、Julia との恋愛体験こそ作家が第二部を創作する原動力となったと、思われる。此の問題、すなわち、第二部を創作する Stendhal の意図を Martineau は次の如く説明する。彼が Julien なる田舎出身の青年を Plutarque、なかならず Napoléon の弟子として創作を意想したのは30年1月17日のようであると、推測している。けれども私がかかる推定には疑問を持たざるを得ない。執筆中の作家がすでに創作した部分に必然的に誕生している作品像を容易に変貌させうるなどとは考えられないことである。すでに私は『Lucien Leuwen 論』で研究したテーマである作者と作品像との関係は小説の完成なり、形成過程なりで発生を観るのではなく、作者が小説を創作し始めたときすでに彼は作品像を脳裏に描いていると観られる。それゆえ、Colomb が見たと

いう〈Julien〉はすでに主人公が Napoléon の弟子であることにかわりはない。

さて、作品を詳細に読むと理解されるのであるが、Stendhal が第二部で布衍している部分を示唆しうる。例えば、『Hernani』、『Manon』のバレエなどに触れた頁がそれである。とにかく30年4月8日の彼とルヴァスール書店との契約によると、Stendhal はこの作品の二冊本と六冊本の各々750部の権利を書店に1500フランで売却している。ところでこの契約書は書名に就いての興味深い事実を教示している。それは契約条項の一条に Stendhal が本の題名を『Julien』としようとしていたとあることである。このような根拠から『Le Rouge et le Noir』という書名が決定されたのは30年の5月になってからであろうと看做されている。此の作品の創作問題に推定事項が多いのはこの小説の原稿が一枚も現存していないからである。けれども Stendhal の手許にあった本や、後世に残る彼の他の著作の原稿などに散見している余白に記された覚書から作家の仕事ぶりを部分的に研究することができる。この経過を続いて Martineau の研究に従って紹介したい。確かに最初の原稿が5月に出版社に渡されたと思われる。5月12日に彼は3回目の原稿分である五章の後半と六章の前半を訂正している。20日には7回目、(九章の後半と十章、それに十一章前半)。25日に9回目、(十三章後半と十四章、但しこの最後の頁欠除)。ここまでが第一巻を形成している。第二巻に入って7回目にあたる7月25日に作成された原稿は8月4日にやった印刷された。その遅延理由は植字工が仕事を抛棄して栄光の3日に参加していたからである。その数日間 Stendhal はロテル・デ・ヴァレの自室で銃声を耳にしつつ何処へも行かず例の『Mémorial de Sainte-Hélène』の余白に内乱の進行を記していたという。また、彼が『Vie de Henri Brulard』で告白しているところから推測すると、Julia の部屋にもいたことになる。さて続いて第二巻の11回目の原稿を訂正したのは8月11日である。この後も作家は縮めたり伸ばしたりして修正していたと推察されるが、丁度、その頃作家の社会的身分



に変化があった。Stendhal は新政府からトリエステの領事に任命された。一方、彼は Giulia との結婚を考えて彼女の後見人 Berlinghieri 公使と交渉していた。かかる作家の一身上の都合から Stendhal は出版者に次の書簡を送ったと観られる。

《En vérité, Monsieur, je n'ai plus la tête à corriger des épreuves. Ayez la bonté de bien faire relire les cartons……Puisse ce roman être vendu et vous dédommager des retards de l'auteur.》—〔5〕

このような社会的個人的事情が小説の印刷に6ヶ月も要する結果となったのである。

## 第二章 Berthet 事件

此の小説は作家の創作行為を研究テーマとして求める場合、そのテーマは小説化された諸事実を含むと規定できる。そして研究すべきは第一章で触れた Berthet 事件であり、それは小説全体の〈Source〉でもあり、〈Modèles〉でもある。但し、第二部にはその影しか見せていない。此の事件は作家に執って関心を強よく覚える個人的関係があった。此の裁判の判事 Michoud 氏と Stendhal はかつて友人であった。また、判事は射たれた女性の夫と従兄弟であった。Stendhal 自身は事件を『Gazette des Tribunaux』を読んで詳しく知ったとしても、此の事件はパリのサロンでも話題になったと思われる。作品の第二部、第四十一公判の前章に、

《Le Pays se souviendra longtemps de ce procès célèbre. L'inérêt pour l'accusé était porté jusqu'à l'agitation : C'est que son crime était étonnant et pourtant pas atorce. L'eût-il été, ce jeune homme était si beau! Sa haute fortune, sitôt finie, augmentait l'attendrissement. Le condamneront-ils? demandaient les femmes aux hommes de leur connaissance, et on les voyait pâlissantes attendre la réponse. Sainte-Beuve》—〔6〕

そして、Stendhal は若い友人 Sainte-Beuve のこの感想に同意を示したであろう。

H. Dumourard の『Pages Stendhaliennes』から一連の Berthet の書簡をたどってみよう。

1827年9月28日の手紙

《Je voudrais être jugé et être après-demain conduit au supplice, la mort est le plus doux pardon que je puisse obtenir. J'assure qu'elle n'a rien qui m'effraie. On m'avait déjà fait assez abhorer la vie pour que vous ne venez pas par vos traitements me la rendre encore plus odieuse.

《Ne me faites pas respirer plus longtemps un air corrompu. Permettez-moi de paraître quelque fois à la cour, où je promets de ne pas ouvrir la bouche, et que l'arbitraire ne continue pas à augmenter mes maux…… Berthet.》—〔7〕

此の手紙に相当する小説の部分と比較して観ると、その最初の部分を第二部第三十六章の未行に読める。Julien は Matilde に対して面倒でも果しておかねばならないことを考えたり、牢番から Rênal 夫人の傷が致命でなかったことを知ったりしたあとで数日を訊問もなく一人で過すことができ、彼は自分の心を諦観する余裕を持った。そこで Stendhal はこう書いている。

《Il ne trouvait rien que de simple dans son affaire : J'ai voulu tuer, je dois être tué.》—〔8〕

と。

牢獄の件に就いては第四十二章に Matilde が死刑に対する訴訟もしないのかと立上って眼を怒り輝かせながら言った。それに対する Julien の返事。

《—Parce que, en ce moment, je me sens le courage de mourir sans trop faire rire à mes dépens. Et qui me dit que dans deux mois, après un long séjour dans ce cachot humide, je serai aussi bien disposé?》—〔9〕

次の Berthet の手紙に移ろう。1827年9月30日のもの。

«Que mon corps et mon âme soient sur-le-champ et pour toujours livrés à toutes les horreurs de l'enfer si je ne consens pas à monter sur l'échafaud demain, si l'on veut, tant sont violents les maux de tête que j'éprouve presque continuellement. Au nom de Dieu et de l'humanité, veuillez me procurer quelque soulagement, ou m'apporter un pistolet pour me délivrer d'une vie que j'abhore. C'est indignité des plus révoltantes de me faire souffrir si inhumainement, pour le plaisir seul de me faire souffrir.

«Monsieur, Mettez-moi quelquefois et pour quelques instants à la cour, placez à coté de moi un homme qu'il vous plaira de choisir, donnez à cet homme une longue épée, et si j'ouvre la bouche, qu'il me passe cette épée au travers du corps. Non, Monsieur, je ne diffame point M<sup>me</sup> Michoud; le monde ignorera éternellement son indigne conduite à mon égard. Comme je ne pouvais lui parler devant les hommes, je voulais lui parler devant Dieu et lui demander là ce qui la portait à me desservir ainsi, Chose inconcevable! M<sup>me</sup> michoud, en me perdant n' a rien diminué de l'affection que j'avais pour elle; elle aurait peut-être rougi de ses procédés si elle eût pu me deviner au moment où j'allais la frapper.....Ce que je puis obtenir de plus doux, c'est la mort. Je veux la demander à mes juges et même les insulter à dessin de l'obtenir plus facilement. Mais au moins, monsieur, ne me la faites pas respirer chaque jour, dans mon infernal réduit.....»(Berthet)―〔10〕

此の手紙の始めに Berthet が夫人に恥を知れと叫んでいることを明らかにしよう。Berthet と Michoud 夫人との関係は Rênal 家のあらゆる場面から Julien のパリ行き迄の彼と Rênal 夫人との関係に酷似している。Berthet は Julien と同様15ヶ月に及ぶ婦人との情事の最中に中断していた神学の研究を続けるためにベレイの神学校に入った。一方, Michoud 夫人は Rênal 夫人と同様愛人に手紙を送ることで苦悩を和らげていた。しかし, 1825年8月,

Berthet は別離からくる夫人との愛のなかに疑惑を覚えた。彼がブラングに帰ったとき愛されている自信を失くした。そして、自己の後釜の家庭教師が夫人の愛を得ていると思い、その瞬間、Berthet は嫉妬の俘虜となった。それでも彼は一度は戻った神学校では Julien の神学校でのように称讃の的となる程勉学に励み、心の嵐を沈めようと努力したようであるが、一度狂った運命の歯車は神の場さえも躊躇を見せなかった。聖職者の習慣に染った Berthet は上司に自己の恋物語を迂闊にも告解してしまい、ミイラ取りとなった。かくて彼の告白は永久に聖職に就くに応しくなく、立身出世の夢も無残に消失する。さらに病気がちの不安に加えて、追憶の愛の舞台も顧眄の余地すらなく今一度踏もうとしても、もはや彼のための幕はなかった。かかる Berthet を無理心中に追いやったのも必然であったであろう。此の断片的荒筋が意味する如く Berthet は恋人が不義を、と言っても不条理な不義だが、働いたと誤解したのである。Michoud 夫人は誠実であったというが、これもなんと不条理な誠実であろう。ともわれ、此の誤解ゆえ Berthet は夫人の仕打ちは恥に 価すると激怒したのである。これが第二の手紙の舞台である。しかるに小説ではこの場は逸話でしかなくなっている。第二部の第三十八章権勢の人のなかで Matilde は狡猾な Frilair 師 と対面している。彼はさりげない様子で語っている。

《Je ne serais pas surpris après tout, … quand nous apprendrions que c'est par jalousie que M. Sorel a tiré deux coups de pistolet à cette femme autrefois tant aimée. Il s'en faut bien qu'elle soit sans agréments, et depuis peu elle voyait fort souvent un certain abbé Marquinot de Dijon, espèce de janséniste sans mœurs, comme ils sont tous.》—〔11〕

このように Berthet に執っては犯罪の直接原因となった動機が Julien の方では動機となっていないばかりか彼も Rénal 夫人もあずかりしらない逸話でしかない。さてこのように Berthet の手紙から判断して動機がまったく似ていないと指摘したのであるけれども、Julien には Berthet の嫉妬はな



いが愛の姿勢には差がない。多分、Stendhal もそのことを直観していたであろう。判決を受けたのちの Berthet の手紙を読むとき、Stendhal が Berthet を〈modèle〉に Julien を彫刻したとしても不思議はないであろう。次の文章は判決後の Berthet の手紙であり、1827年12月17日の日付がある。

«L'humble mais honnête réputation de la famille à laquelle j'apportiens m'aurait fait préférer une perpétuité de travaux forcés à l'échafaud. Ce choix n'a pas été en mon pouvoir. La Cour m'a frappé de la peine de mort : mais à l'infamie qui doit être le terme de mes jours malheureux, je ne veux pas ajouter le secret reproche d'avoir diffamé une dame infiniment respectable et que recomonde à la société la pratique de toutes les vertus morales.....Une passion qui m'a frayé le chemin de l'échafaud, la jalousie, me faisait croire le jeune Jacquin plus heureux que moi. Elle me portait à croire M<sup>me</sup> Michaud coupable. Si, rétractant tout ce que j'ai avancé d'injurieux à une si honnête femme, je ne puis entièrement lui rendre honneur que lui mérite son innocence, je la prierais d'accepter au moins mes larmes et mon repentir ; je la prierais de pardonner à un homme bien sincèrement revenu de ses égarements et de ses erreurs;...un jeune homme qui montera sur l'échafaud avec la douleur de ne pouvoir la louer assez longtemps, de ne pouvoir réparer le scandale qu'il a donné; avec la douleur de courir d'infamie, de déshonorer à jamais une famille pauvre mais honnête...»-[12]

このように Berthet 事件の顛末は小説の第一部と第二部の終章に主人公の役名さえ変更すれば殆んど完成したとも観られる梗概を作家に提供している。しかし、Stendhal のかかる小説作法に就いて、Stendhaliens が口癖にする一つに彼の小説は〈Sources〉に忠実であり、Julien なり Fabrice の運命がどうなるかも読者に執って容易に予想できることであると称しているのがある。このような研究の前提はなんらかのテーマに就いて研究者が実証的

研究に成功したと確信しても見落としがあるのではないかと、私は常々そう思っている。それは実証的研究がその特性から部分の解釈に進む傾向があり、作品全体を細分化することは必然であり、また、それは作品像の破綻をも意味することになり、そこに研究方法の弱点が露呈するのは否定できない真理であると思う。此の論文の第三章、及び、第四章で、此の問題をテーマとして作品論と並行して詳論したいと思う。

さて、小説の第二部、第一部が晝の舞台なら、まさしく第二部は夜の舞台と言えるこの舞台に登場する人物たちの〈modèles〉の研究も皆なされたと観てよいが Matilde に就いては少し附加したいと思う。作家が作品を執筆し始めた時期にある恋愛事件があった。此の実話を Maurice Parturier が今日残している。1929年に彼は『Les Lettres de Mérimée aux Grasset』を出版したなかに Charles X の大臣の姪 Marie-Henriette de Neuville の話がある。Marie は少女時代の友 Edouard Grasset とともに数日間ロンドンへ失踪した後、家族のもとへ帰ったが如何なる心がありか結婚を空しく求める Grasset と絶交してしまった。そして、相手のことが話されるのを永久に聞かまいと願ったという。此の恋愛事件から作家は成り上がり者に身をゆだねたことを忌々しく思い、相手に接するに高慢で構柄な態度、そして急変する心などを示す上流社会の娘の実例を観察したことであろう。

Stendhal は小説に対する友人たちの批評に答えてトリエステから Mareste に1831年1月17日に手紙を出している。

« Cette fin me semblait bonne en l'écrivant, j'avais devant les yeux le caractère de méry, jolie fille que j'adore. Demandez à Clara si méry n'eût pas agi ainsi. »—〔13〕

けれども Stendhal は Marie=(Méry) と面識がなかったようであるから、Marie が Matilde の性格形成に果した役割は実社会にも Matilde の如き娘が存在することの実証である。作家が誕生させたヒロインが上流社会に実在している。その確信が創作中の作家の筆意に安心感を与える点にむしろ意義

がある。

Matilde の〈modèle〉は今日では Stendhal が愛した二人の女性と看做されている。Stendhaliens の誰もが Matilde の〈modèle〉は Métilde Dembowski がその一人であることに異論をとらえるものはない。此の点に就いての Jean Prévost の見解は Henry Martineau に組し、Jules Marsan の異論は当らないとし、Julien と Matilde の物語は Métilde と Beyle (Stendhal) の〈amour〉であり、Métilde と Matilde の外見的類似性は勿論ないが、〈émotion と modèle〉の〈sources〉は別の問題であると結論している。

なお、André le Breton も『Le Rouge et le Noir』を論考しながら Métilde Dembowski の作品への影響を拡大して次の如く述べている。

«Morte prématurément 1825, elle lui deviendra plus chère même que de son vivant; elle sera pour lui ((un fantôme tendre, profondément triste, et qui par son apparition le dispose aux idées bonnes, justes, indulgentes)). Sous un nom ou sous un autre, il l'évoquera dans la plupart de ses oeuvres, dans le livre De l'amour, dans les Souvenir d'égoïsme, dans Leuwen, dans le chartreuse de Parme; et à cinquante ans, dans sa Vie de Henry Brulard, il jettéra encore vers elle ce dernier cri, cette suprême et poignante interrogation: ((m'aimait-elle?))»—〔14〕

此の問題に就いては私も Martineau, Prévost, Breton の見解に同感であるが、しかしながら〈émotion〉に就いてもそれが具体的には Matilde と Julien の〈amour〉の内面的〈sources〉の一部分にすぎない。Stendhal が Métilde を真にモデルとして活用したのは『Lucien Leuwen』の Chasteller 夫人であると思う。他の部分は明らかに Giulia と Stendhal の〈amour〉が〈source〉となっている。Jean Prévost の Giulia と Stendhal との関係がどのように作品に投影されているかの研究は以下がそれである。

«Ce n'est pas non plus l'histoire du séminariste Berthet qui a fourni ces longs monologues de la passion malheureuse. En 1830, la avait accordé à

Beyle ses revanches—la dernière avec l'amour de Giulia. Il lui aurait été trop pénible encore de transposer de trop près ce souvenir douloureux;… La revanche imaginaire, ce rêve de compensation qui succède à la douleur de l'échec et en marque la convalescence, est un des excitants les plus forts de l'imagination créatrice.》—〔15〕

此の見解は Jean Prévost が如何なる資料に基いて述べているのか不明であるが、私には誤謬があるように思える。すなわち、彼が Stendhal と Giulia の関係を部分的にしか考えていないように思える。Stendhal は彼女の後見人 Berlinghieri 公使との彼女に結婚を申し出て断られはしたが、それはあくまで形式的にすぎず、彼と Giulia との関係は Stendhal が死ぬまで続いている。その一例として1834年5月4日に彼の少年時代の女の友 Gauthier 夫人に宛てた手紙の一筋に次の言葉が読まれる。

《…On se dit; vais-je vivre, vais-je vieillir loin de ma partie ou de la partie? Cela est plus à la mode. Je passe toutes les soirées chez une marquise de dix-neuf ans, qui croit avoir de l'amitié pour votre serviteur. Quant à moi, elle est comme un bon canapé bien commode. Hélas! rien de plus, je n'ai pas davantage; et ce qui est bien pis, je ne désire pas davantage.》—〔16〕

### 第 三 章

André le Breton の示唆を待つまでもなく、Julien の生涯は〈combat incessant〉である。意識された自我と、無意識に現われる自我との相剋に彼の生涯を観るのは自然である。『Vie de Henry Brulard』で自己分析を試みてそう告白したのは Stendhal 自身である。Julien が社会のなかで統覚の方程式としたのは自己を意識する場合の身分の自覚がそれであり、偽善を甲冑がわり纏う姿がそれである。しかるに彼の偽善ぶりを眺めると、相手に憎悪



を覚える限り Julien の心は後悔に苦しむことはない。例えば、Valenod 氏や Rénal 氏を相手とする場合がそうである。それで Julien はごく自然に彼等に〈Monstres! Monstres!〉と呪いの言葉を投げかける。ところが彼は彼を愛して呉れる人々にも自己の偽善を意識する破目になると非常に辛い良心の呵責を覚える。

Julien の性格を数頁にわたって考察してきた André le Breton はかなり唐突にピストルの場を Emile Faguet の不審を引用して論考している。彼は Emile Faguet の文章を一頁に及び紹介しているが、それを以下に要約したいと思う。Faguet は作中人物が皆どうかしているという。突然、皆を異常にする事件が発生する。それは夫のある女性が Julien の愛人であったと、手紙に告白し、それを読んだ La môle 侯は激怒して Julien の弁解を聞くことすらせず、Julien が得ていた全てを取りあげてしまう。一方、最も冷静な野心家であった筈の Julien が皆のなかで最も非常識になる。そして、La môle 侯が冷静になり、Julien が得ていたものを再び侯が彼に返すまで、Julien は待ちさえすればよかった。と、Emile Faguet は不審を表明し、さらに念を入れて次の如く繰り返している。

「Julien n'a qu'à attendre. Il n'attend pas. Il court à M<sup>me</sup> de Rénal et lui tire un coup de pistolet.」—〔17〕

André le Breton は Emile Faguet の疑問を上述の如く引用しつつ〈ピストルの場〉を論じてゆく。しかしながら、此の場を肯定するか否定するかは Julien に対する今一つの判決であると思う。作家は Julien を処刑台に送ったがこの第二の判決は Julien を文学の世界に蘇生させることになるからである。けれども、此の場に限定して論考する研究態度には反対である。此の〈ピストルの場〉は小説全体のなかで、つまり、作品像と関聯して研究されるべきであると思う。しかし、此の場は小説の最も考察されるべき問題が凝結していると観ることに異論はない。

では André le Breton は如何なる見解を導いたのであろうか、彼は Sten-

dhal の Julien と、Balzac の Rastignac とを比較している。梟雄である Rastignac に執っては女性を愛することも立身出世の手段でしかなかったが、Julien は Desgrieux, Saint-Preux, 及び, Werthre の兄弟であると看做して、

《…il était condamné d'avance et de par sa nature même à échouer, comme son père Stendhal, dans sa poursuite du succès,—condamné à perdre la bataille que gagnent les ((dévorants)) balzaciens.》—〔18〕

と、結論している。ところでこの結論は先述してきたようにすでに作られた Stendhal 研究の伝説を鵜呑みにしている態度が認められると言えよう。此の小説のみならず『Chartreuse de Parme』にしても始めから全てが〈Sources〉に酷似しているから Stendhal 小説の結末は分っている。これが Stendhal 研究の伝説であり、踏襲でもある。それで、此の〈ピストルの場〉に就いても〈Berthet〉と同じだからでは研究の余地はない。

次に Henri Martineau がこの場をどう観ているのかを紹介して置きたいと思う。彼の研究によると、単純な批評家たちは Stendhal が Julien の狂気を描写する術が発見できず、その結果、一頁で胡魔化したと主張していたしかかる批評家たちに対して Martineau は彼等が真の病理心理学を誤解しているからであると看做し、Stendhal 小説の簡潔さは読者に困惑を投げかけるどころか、反対に彼の天才の新しい証拠を示すものであり、なに人もかって予想された学説を把握した例はなかったのである。すなわち、作家はただ真実を追求し、それに成功した。あれほど理性的でいつも徹底した反省をした後にのみ自己の行動を考え、納得がいかなかったら実践することのなかった Julien が突然急変して激怒の捕虜となり、抑え難い衝動にかられて無意識に犯行を犯すであろう。と、Stendhal はそのように Cabanis の観察を洞観したのであると、Martineau は結論している。—〔註1〕

次に Jean Prévost がこの場に示した見解を紹介したいと思う。此の場に就いての彼の解釈は他の Stendhalien よりいっそう具体的である。Prévost

は『La Création chez Stendhal』のなかで歌手は最も感動的な高い調子に到達した瞬間、聴衆に人間的手段を越える効果を与えるために発声を止めて口を開けたままにしていると比喩し、そのあとで、

« Dans un roman comme *Le Rouge et le Noir*, ce genre d'effets correspond à une vérité humaine ; Les passions, arrivées à leur point extrême, renversent leur effets : plus elles agitent l'être, plus il semble immobile ; plus il est tourmenté, plus il paraît indifférent. »—〔19〕

と、述べてさらに古典主義作家はこの真実を知っていたが、その真実を価値づける手段を所有していなかった。作中人物（あるいは話者自身）が〈demeure stupide〉になることを彼等は見抜いていた。舞台上役者がそうになると見物人は彼がセリフを忘れたと思うであろう。そして、われわれが作中人物に就いて知っている全ての知識が対話からくる物語に執ってはこの沈黙をどう表現すべきか、それにまたこの内的虚無をどう描写すべきかが問題となる筈である。

Jean Prévost はこのような前提を Stendhal 作品に求めると三場面であると看做している。第一場面は Julien と Rênal 夫人との別離の場合であり、夫人は意味のなさないことを二言三言つぶやくのみであり、それは、

« Julien finit par être profondément frappé des embrassements sans chaleur de ce cadavre vivant... »—〔20〕

Prévost による註は、

« Il fallait ces lignes, peut-être les plus belles de Stendhal pour compenser ce cruel moment d'entrée dans l'ombre. »—〔21〕

となる。

第二場面は Julien の策略が効を奏し、Matilde から得た勝利の後での Julien の応答を観ると、情熱の烈しさに比較して、彼の言葉の冷淡さと、その無意味さとは対象的である。此の場面に就いての Prévost の註は次の如くである。

«L'effet négatif de la ((voix à peine formée)) est compensé, à chaque moment, par le chant de triomphe intérieur.»—〔22〕

第三場面、これが Prévost の指摘した最後の場となるであろう。ところでそれまでわれわれの精神に執って全く明白であった Julien がその犯罪の場で突然影の部に分入る。此の場に就いての Prévost の註は、

«Ce n'est plus qu'une forme qui s'agite; meme à l'intérieur du héros il ne reste, semble-t-il, plus rien. Ici encore, la vérité psychologique ou plutôt pathologique de cet obscurcissement de la conscience est attestée par les médecins de l'esprit…»—〔23〕

と、述べている。さらに Berthet 事件が真実であったということを強調し、そのあとで Prévost はこう結論している。

«L'auteur allait, par ces moyens rapides, vers les derniers sommets de son ouvrage. C'est seulement dans la prison que nous vous voyons Julien au-dessus de l'ambitions, au dessus même de son amour ambitieux pour Matilde, et au niveau de madame de Rênal. Il n'est plus tendu vers l'avenir.»—〔24〕

此の文章のあとで Prévost は Stendhal が始めて Julien に高尚な性格を与えたと看做している。そして、Prévost は特に註を試みて作家 Stendhal 自身が1815年後に高貴な性格になったというのである。すなわち、

«Stendhal peut lui prêter enfin cette liberté de rêve et de jugement, cette partie noble de son propre caractère, formée après 1815, et dont Julien avait jusqu'alors manqué.»—〔25〕

Stendhal の生涯で1815年が意味するものはなにかが問題となるであろう。此の年は Jean Prévostばかりでなく従来 Stendhaliens が問題としていたものである。

〔註1〕 Henri Martineau は、Charles Du Bos こそ Julien の如く人間が抑制していた情熱の横溢を夢遊状態で行動に移すと、主張した初めての研究者である。とし



て注目している。すなわち、烈しい情熱の捕虜となった Julien に執っては犯行を犯さない限り現実には戻れない。そこでは時間と空間に依存する日常の感覚が消失している。そうしたなかでの Julien はすっかり自分の生活を投げやりに行っている。時間と空間を失くした Julien の狂気の誘因となったものは La Môle 侯の Julien に関する身上調査に答えた Rênal 夫人の侯宛の返事こそまさにそれであった。Matilde の不安通り、彼は手紙を読むや別人となり、瞬時にして眼前の Matilde も含めて全ての現実像は彼の脳裏から消失してしまっている。此の状態の Julien を、Martineau は Stendhal が本能からかかる心理状態を推測したことは大きな功績である。と、述べて、Julien が犯行を決心した。と、すぐさま、Stendhal は彼からあらゆる思考力が失くなくなることを、書物から学んだとは思わない。というのはいかかか心理を実証するかの如く、此の小説が出版されてから一年もたたない頃、次のような噂がローマに流れて評判となったが、Stendhal はこの噂が Julien の心理喪失の場面をありうることでありうることに役立つものとして興味を覚えていた。

Martineau はその証拠として作家が自己の手許にあるこの小説の余白にその話を記していたことを挙げている。その噂とは Julien の如き主人公を Hector Berlioz と言い、彼は1831年4月1日に彼から去った許婚者 Camille Mocke の姿を追ってローマを出発した。彼女の情報を知らなかったのである。病人の彼には羈旅は無理でしばらくフィレンツェに滞在しなければならなかった。その彼に宛た娘の母の手紙は彼女が Pleyel と結婚することを告げていた。その瞬間、Berlioz は母娘の共謀を見抜いたのか二人を殺し、自分も自殺しようと決心した。彼は女装してトランクにピストルを入れてフィレンツェを出たがピエトラサンタで女装道具を失くした。そこでデュネスで新調したあとでニースに向った。だがその地で彼は目覚めたのである。確かに Stendhal は彼の Julien を Berlioz に観たであろう。

## 第 四 章

前章までいわゆる Stendhaliens の研究を主に紹介しつつ私見をまじえてきたが、此の第四章で筆者自身の見解に基づき結論を展開したいと思う。先章で紹介した André le Breton が注目していた Emile Faguet の〈ピストルの場〉に対する 睦若も 確かにある一面を洞察していることは 否定できま

い。あるいは André le Breton 自身の見解の如く Julien は作家 Stendhal の分身ゆえ Stendhal と同一の運命を担っているとする見解も成立するであろうし、Jean Prévost, Henri Martineau の見解である Antoine Berthet の運命が真実ゆえ、それが Julien の宿命となったと看做す見解もあろう。かかる見解から Stendhaliens は先章でわれわれが観た如くあの〈ピストルの場〉を論考していた。そして、Jean Prévost は若し作家が Julien を Balzac の Rastignac の如き立身出世に成功した人物として創造したならば小説の価値を下落させたであろうと、断定しながらこの場で Antoine Berthet が Julien を意のままにすると述べている。さらにすでにわれわれが観た如く Jean Prévost は〈prison〉で始めて Stendhal が Julien に高貴な性格を与えたと看做し、Rênal 夫人の純愛に応しい愛情を Julien が夫人に覚えたとして観ている。そして、これを Prévost は証明するために作家自身が1815年後に高貴な性格となったと看做している。しかし、私はこの見解とは全く異った見解を執っている。すでに私は名古屋大学仏文研究誌の「ヴァリエテ」、2号に『Stendhal の人間像』と題する論文を発表したが、さらにそのテーマを進展させた論文を岐阜経済大学論集の第4巻第2号に発表した。この両論文が研究した主題こそ1815年に Stendhal の性格が変わったと看做してきた Stendhaliens の定説を否定するものであった。それゆえ〈prison〉の場で始めて Julien が高貴な性格となったとは思えない。むしろそれは Julien と Rênal 夫人の愛が紆余曲折を経て、というのはそれまで他者から邪魔された愛が〈prison〉という俗世界から遮断された次限で相愛の二人が他者に遠慮することなく居られる。此の愛の極限のなかにもはやすれちがいは認められない。

«Dès que je te vois, tous les devoirs disparaissent, je ne suis plus qu'amour pour toi, ou plutôt, le mot amour est trop faible. Je sens toi ce que je devrais sentir uniquement pour Dieu : un mélange de respect, d'amour, d'obéissance... En vérité je ne sais pas ce que tu m'inspires. Tu me

dirais de donner un coup de couteau au géolier, que le crime serait commis avant que j'y eusse songé.》—〔26〕

此の小説が情熱を主題とし、作家 Stendhal が情熱の化身として Julien を創造したであろうことを今さら繰り返す意図はないが、われわれが問いたいのは小説を読んで Julien の人生での態度、即ち、積極的な社会への挑戦から受ける印象は無論情熱に相違ないが、それだけであろうかという反問が残る。情熱の緻密な分析なくしてはどうして Julien の野心が成就しなかったかを説明するに至らないと考えるからである。例えば幾度か指摘したが、Emile Faguet の瞳若も実はこの情熱の咀嚼不足にあると看做してもよいであろう。また、創作に焦点を当てての発言である Berthet 事件の筋通りの創作だから結末は分っている。かかる見解も一見小説を忠実に解釈しているかの如く見える。けれども、いったい Julien は小説に登場してからいわゆる野心家であったであろうか。Julien の野心が少なくともこの小説の作品像の一翼を形成していることは認めない者はいない。と同時に、その肝心の野心の綿密な分析を試みた者もない。

偽善に就いては Stendhal も Julien をいわゆる偽善者 Tartufe としては創造していないことはすでにわれわれも観ている。Stendhaliens のなかにもこの事実を再確認している者もいる。

だが、Julien が拘く野心に就いてはそれが如何なる範疇に属するものなのかをまともに言及している研究者は殆んでいない。というよりは世欲的価値観のまま野心を把握しているがゆえにわれわれが明白にしてきた如き齟齬を呈している。私の Julien の野心に就いての把握は彼の野心が空想的なものであり、現実的な計算から成立しているものではないという点にある。空想的な野心はプラトニックな愛と同様の純粋性を保つ筈である。此の純粋性には現実的な打算は存在しない。

Julien のかかる野心を観察する象徴的な章としてわれわれは第一部の第十二章と第十三章とを引用したい。Julien は友人で材木商人の Fouquet を訪

ねる。Fouquet は現実的な野心を Julien にふきこむ。彼の提案こそ Julien に執って着実な立身出世の道となる筈であった。Fouquet が Juelin に約束する年四阡フランはまさしく計算しうる野心そのものである。しかし、動揺する Julien の心に Napoléon の姿が浮ぶ。Julien に執って Napoléon は純粹な野心の象徴である。若し彼が世欲的野心家なら実現不可能と思える野望を夢想せず、打算的な処世を撰択し、Fouquet の四阡フランを数えたであらう。Emile Faguet もすでにここでこのような疑問を提出すべきであったであらう。作品に戻ると作者自身がこれら二章の結論を第十四章の冒頭で展開しているのが読まれる。

《Pour Julien, l'offre de Fouquet lui avait en effet enlevé tout bonheur; il ne pouvait s'arrêter à aucun parti. Hélas! Peut-être manqué-je de caractère, j'eusse été un mauvais solda de Napoléon. Du moins, ajoutat-il, ma petite intrigue avec la maîtresse du logis va me distraire un moment.

Heureusement pour lui, même dans ce petit incident subalterne, l'intérieur de son âme répondait mal à son langage cavalier.》—〔27〕

Julien の野心に就いて論考するのは以上にして、偽善の淵藪で生活している彼を眺めたいと思う。今、Julien は町の上流社交界で暮らしている。Rênal 家で始めて上流社交界の連中と会食した際には彼等の偽善ぶりに堪え難くなり、その場から逃れ去った Julien も今度は彼等流の偽善ぶりを自ら演じている。かくては彼は流行児となったと作家は Julien の変貌を読者に告げる。しかし、かかる姿の Julien を最後まで描写することは作家の本心ではないので、真の姿の Julien を何処かで読者に眺めさせる。

《Dans le flot de ce monde nouveau pour Julien, il crut découvrir un honnête homme; il était géomètre, s'appelait Gros et passait pour jacobin.》—〔28〕

どうして Stendhal は偽善ぶりを発揮し、そうした演技に熱中している Julien に Gros という高潔な幾何学者を眺めさせるのか。此の場は問題とい



うよりもそれを開ける鍵という方が妥当であるように思える。その一つは作品解釈上で必要であり、もう一つは作家の創作上で必要である。それでこれらの二個の鍵は使用されるべきであろう。私は先に岐阜経済大学論文集第3巻の第一号に『Lucien Lewen に就いて』と題する論文で〈La prédestination de création〉の問題として伏線論を展開し、私なりの小説観を試みたつもりである。『Lucien Leuwen』では作家は自身の体験のみを作品に投影し、その結果、作品自体は未完成のままであったが、此の『Le Rouge et le Noir』には Berthet 事件があり、作家はその軌道を走りさえすればよかった。それで作者の体験から由来する創作の鍵は一步下ったところに焦点がある。『Henri Brulard』を開けば少年 Beyle (=Stendhal) が Gros という幾何学者でジャコバン党員と噂されている彼に数学を習いに通ったことが読まれる。此の鍵は作家と作品に重大な関係があるということを『Lucien Leuwen』論で私は詳述したので参照して頂きたいと思う。

第一の鍵に就いて今少し考察して観ると、主人公 Julien の性格の本質が高潔さに特色を有していることを作家は読者に再確認させる意図があると考えられよう。すでに作家は第十三章で Rênal 夫人に次の如く Julien 像を語らしている。

《Elle croyait l'âme de Julien plus noble que celle de tous cousins, tous gentilshommes de race et plusieurs d'entre eux tirés》—〔29〕

(此の引用を〔注Ⅱ〕とする。)

Julien は Rênal 家を去り、神学校に入学するが、彼はそこで辛い生活を送る。ただ校長の Pirard 師のみが彼の保護者となる。あるとき Julien が司教から Tacite 全集を頂戴したことを知ると、それまで彼の周囲にいてことごとく敵意を示した傲慢な学生や上司は手のひらをかえした如く彼の御機嫌を取り、卑屈な態度を示す。こうした連中に対して Stendhal は Julien に語らせている。

《Par une fatalité du caractère de Julien, l'insolence de ces êtres grossiers

lui avait fait beaucoup de peine; leur bassesse lui causa du dégoût et aucun plaisir.》—〔30〕

作家は主人公 Julien が連中と性格を大いに異にするこゝろを讀者に喚起させる。彼の性格が世俗に組みする感情とは絶体は無縁であることを作者は讀者に常に明白にして置きたいのである。即ち、Julien の性格が純粹さをあくまで保持しており、彼が偽善に取り囲まれて生活しようとも少しもそれに毒されない証拠と考えられるであろう。と、同時に作家がこの純粹性をどこまでも Julien の性格のなかに留めおく努力を続けていることも、われわれ讀者は注目しておかねばならない。このような性格の Julien がどうして世間並の野心を体现していると単細胞的に看做することができるであろうか。

さて、作品の第二部に入ると Julien はパリの La Môle 邸に姿を見せている。やがて Matilde は Julien に上流社会の若い貴族連中に欠除している情熱を認めて彼の言動に注意を向け始める。だが明瞭に彼女が彼を恋する心で眺めたのはかかる Julien ではなく、かつて Rênal 夫人が彼を恋する心眺めたのと同様の心理が働いたときであった。あるとき、Julien は彼女の話に耳を傾けながら反省せざる得なくなる。自分が貴族にかなわないのは連中が先祖の歴史から卑屈な考え方をしない点であると。それに反して自分の生活は偽善に満ちている。かくて Julien は自己嫌悪に捉えられ、弱気になる。

《Il rougit beaucoup en parlant de sa pauvreté à une personne aussi riche. Il chercha à bien exprimer par son ton fier qu'il ne demandait rien. Jamais il n'avait semblé aussi jolie à Matilde; elle lui trouva une expression de sensibilité et de franchise qui souvent lui manquait.》—〔31〕

Julien がいわゆる偽善者だったからかかる気の弱い感情を Matilde に告白したりはしなかったであろう。ところで Matilde にせよ、Rênal 夫人にせよ、彼女たちは Julien に Danton を認める。否、むしろ誰彼というよりも情熱の化身である Julien に惹かれる。一方、Stendhal は上述の場の如く母性本能を描写している。かかる女心の両面を彼は巧妙に二人のヒロインに配した

と言える。Matilde と Julien との恋も Rênal 夫人と Julien のそれと比較すれば如何にも作られたものとの印象をわれわれ読者に感じさせるとしても少しは論考しておく必要がある。Matilde と Julien との性格には本質的な差がないと私は考察している。此の両者はともに作家 Stendhal の分身性が濃厚である。Matilde に就いて観るなら、第二部の第十一章を取り挙げたいと思う。彼女は社交界の連中から美女少でありながら恐れられる存在である。なぜなら Matilde の情熱を秘めた才智が彼女を取りまく退屈な時間に挑戦するかの如く辛辣な弾丸となって相手を擲擻るからである。此の彼女の姿は作家 Stendhal がサロンで見たものと同質である。彼女のかかる情熱を受ける資格は Julien にしかないと作家はいう。

《…quand elle commença à trouver du plaisir à se promener avec Julien. Elle fut étonnée de son orgueil; elle admira l'adresse de ce petit bourgeois.》—〔32〕

Matilde は Julien の如き身分の者に観られる性格の純粋な高貴さに驚き惹かれる。

《Une idée l'illumina tout à coup; J'ai le bonheur d'aimer, se dit-elle un jour, avec un transport de joie incroyable. J'aime, j'aime, c'est clair!》—〔33〕

Julien が Matilde に示す態度も酷似している。彼は彼女のことを反省して観る。その結果、自分は彼女を愛していると考えて行動する。それゆえ、Stendhal は次の如き描写を試みざるを得ない。

《Après de longues incertitudes, qui eussent pu paraître à un observateur superficiel l'effet de la haine la plus décidée, tant les sentiments qu'une femme se doit à elle-même avaient de peine à céder même à une volonté aussi ferme, Matilde finit par être pour lui une maîtresse aimable.

A la vérité, ces transports étaient un peu voulus. L'amour passionné était encore plutôt un modèle qu'on imitait qu'une réalité.》—〔34〕

此の場面のみならず他の場面でも Matilde は彼女の部屋に死を覚悟して忍んできた Julien の決死的な勇氣に感謝し義務感にかられて彼に身をまかすと、作家は無理な描写をしている。従って、作家自身が不自然なことを承知でこの恋愛を描く程二人の恋の表現は意識的である。窮極の愛の行為すら恋する兩人に執ってはあろうことか思考の対象となる。なぜ意識するかの根源は彼等の志向するところが通欲を嫌悪し、常識に超越した世界にあるからであり、ヒロイックな感情を母胎として誕生する意識であると考えるのが正鵠を射ている。それですでにわれわれが Julien の野心、及び、偽善に就いて分析した結論からすれば、俗塵で通用する尺度で Julien や Matilde の言動を批判することは徒勞である。換言すれば、敢えて計るとわれわれは主人公たちの言動一切が異常であるとして批判する愚を犯かすであらう。Stendhal 小説の主人公たちが示す言動や意志を規定する尺度がないと看做すよりもむしろ別の世界に通用する尺度が必要であり、これは Stendhal 小説全体を支配するものであり、彼の小説のある部分にのみ通用する尺度ではない。

これまでの説明を纏めると、Julien は結局欲人になり切れなかったことになる。彼が欲人になることが出来たら、Emile Faguet が望んだ如く彼は〈待ったであろう〉が、彼は待たず死刑台に登ることになる。Julien 像をこのように把握して観ると、Prévost の結論である〈prison〉の場面で始めて Rênal 夫人に覚えた彼の愛が高尚なものとなったと、どうして断定できようか。Julien の野心も偽善も充分に描かれているが、それは、勿論、作家の技量がそうさせているからに他ならない。というのは作家が Julien に Tartufe の仮面をつけさせ、その仮面を被った Julien も舞台上で Tartufe ばりの役を演じつつとくとすると自己の本性を忘却してわれわれが指摘した如く作家にチェックされて自己を取り戻す程熱心に役に没入していたからである。

さて、われわれは Julien の Rênal 夫人に覚えた愛の本質が高尚であると看做しているが、その発酵の拠点はずでに作品の第一部で読める。即ち、第二十八章を読むとそれが明瞭に理解されるであらう。ある夕暮れどき Julien



は Pirand 校長に呼ばれる。

《—C'est demain la fête du Corpus Domini (la Fête-Dieu). M. l'abbé Chas-Bernard a besoin de vous pour l'aider à orner la cathédrale, allez et obéissez.》—〔35〕

大聖堂の装飾が完了した際、Chas-Bernard 師も Julien もある種の感慨に耽ける。診らしく師は彼を相手に自己の半生を語ろうとしたのである。

《—Enfin, il va me dire son secret, pensa Julien, le voilà qui me parle de lui; il y a épanchement. Mais rien d'imprudent ne fut dit par cet homme évidemment exalté. Et pourtant il a beaucoup travaillé, il est heureux, se dit Julien, le bon vin n'a pas été épargné. Quel homme! quel exemple pour moi!》—〔36〕

Julien は師が絶体に本心を告白しない偽善に驚嘆するが、すぐあとでこの決意も鐘楼に鳴り響く鐘の音に消されて Julien は想像の世界に逍遙している。作家は彼の心境を、

《Le silence, la solitude profonde, la fraîcheur des longues nefs rendaient plus douce la rêverie de Julien.》—〔37〕

と、描写し、彼の心が純粹さに満たされた際に、Stendhal は宿命の邂逅をお膳立てする。かかる心理状態にいる彼の視界に二人の女性が現れる。Rênal 夫人と Deville 夫人とである。職業意識からであろうか、それとも何気なくであろうか、Julien は二人に近づくが誰であるかに気がつかない。彼の足音に Rênal 夫人は Julien を知って気絶する。その瞬間始めて彼は見覚えのある真珠の頸飾りと夫人の髪形を認めて駆けよる。

《La dame qui cherchait à lui soutenir la tête et à l'empêcher de tomber tout à fait, était madame Derville. Julien, hors de lui s'élança; la chute de madame de Rênal eût peut-être entraîné son amie, si Julien ne les eût soutenues. Il vit la tête de madame de Rênal pâle, absolument privée de sentiment, flottant sur son épaule.》—〔38〕

Rênal 夫人が Julien を認めて如何に強烈な衝撃を受けたかを理解できよう。此の衝撃も説明する対象は愛の他にあるのか。夫人の心の琴線は堪えかねて切れてしまったのである。一方、夫人のかかる姿を眺めた Julien はどうであったであろうか。

《L'abbé Chas-Bernard appela plusieurs fois Julien, qui d'abord ne l'entendit pas : il vint enfin le prendre par le bras derrière un pilier où Julien s'était réfugié à demi mort...Rien de moins vrai. Le pauvre garçon était éteint lui-même; il n'avait pas eu une idée depuis la vue de madame de Rênal.》—〔39〕

このように Julien も Renal 夫人と同様、彼の心の琴線は切れている。兩人の心理状態は全く同じ水準にある。(終り)

〔註1〕 此の引用文は Henry Debraye によると Bucci 版にあるもので、第十三章の(…avec le plus de charme.)に続く行がそれである。Arthaud 版の Debraye <Notes et variantes>の頁、377から全文を引用しておく。

《Cette femme, que les bourgeois de pays disaient si hautaine, songeait rarement au rang et la moindre certitude l'emportait de beaucoup dans son esprit sur la promesse de caractère faite par le rang d'un homme. Un charretier qui eût montré de la bravoure eût été plus brave dans son esprit qu'un terrible capitaine de hussards garni de sa moustache et de sa pipe. Elle croyait l'âme de Julien plus noble que celle de tous ses cousins, tous gentilshommes de race et plusieurs d'entre eux tirés.》—〔40〕

引用文の原典、及び、その頁。

〔1〕 Henry Martineau : L'Œuvre de Stendhal. Ed. Albin Michel p. 379.

〔2〕 Ibid., p. 379.

〔3〕 Ibid., p. 379.

〔4〕 Stendhal : Œuvre intimes. Ed. Pléiade p. 45.

〔5〕 Henry Martineau : L'Œuvre de Stendhal Ed. Albin Michel. p. 383.

〔6〕 Stendhal : Le Rouge et le Noir. Ed. Pléiade p. 670.

- [7] H. Dumolard : Pages Stendhaliennes Des Editions J. Rey de Grenoble B. Arthaud successeur 1928. p. 67—68.
- [8] Stendhal : Le Rouge et le Noir. Ed. Pléiade p. 650.
- [9] Ibid. p. 680.
- [10] H. Dumolard : Pages Stendhaliennes Des Editions J. Rey de Grenoble B. Arthaud successeur 1928. p. 68—70.
- [11] Stendhal : Le Rouge et le Noir. Ed. Pléiade p. 660.
- [12] H. Dumolard : Pages Stendhaliennes Des Editions J. Rey de Grenoble B. Arthaud successeur 1928. p. 86—88.
- [13] Stendhal : Correspondance (1830—1832) VII. Ed. Le Divan p. 49.
- [14] André le Breton : Le Rouge et le Noir de Stendhal. Ed. Mellottée p. 61.
- [15] Jean Prévoist : La Création chez Stendhal Ed. Mercvre de France p. 246.
- [16] Stendhal : Correspondance (1832—1834) VIII Ed. Le Divan p. 272.
- [17] André le Breton : Le Rouge et le Noir de Stendhal. Ed. Mellottée p. 271.
- [18] Ibid. p. 272.
- [19] Jean Prévoist : La Création chez Stendhal. Ed. Mercvre de France p. 267.
- [20] Stendhal : Le Rouge et le Noir. Ed. Pléiade p. 368.
- [21] Jean Prévoist : La Création chez Stendhal Ed. Mercvre de France p. 268.
- [22] Ibid., p. 268.
- [23] Ibid., p. 268.
- [24] Ibid., p. 269.
- [25] Ibid., p. 270.
- [26] Stendhal : Le Rouge et le Noir. Ed. Pléiade p. 683.
- [27] Ibid., p. 293.
- [28] Ibid., p. 351.
- [29] Stendhal : Le Rouge et le Noir. Ed. Arthaud p. 377.
- [30] Stendhal : Le Rouge et le Noir. Ed. Pléiade p. 414.
- [31] Ibid., p. 507.
- [32] Ibid., p. 511.
- [33] Ibid., p. 551.
- [34] Ibid., p. 543.
- [35] Ibid., p. 396.
- [36] Ibid., p. 398.
- [37] Ibid., p. 400.

[38] Ibid., p. 400.

[39] Ibid., p. 401.

[40] Stendhal : Le Rouge et le Noir. Ed. Pléiade p. 377.

#### 参 考 資 料

[1] Henry Martineau : L'Œuvre de Stendhal. Ed. Albin Michel.

[2] Henri Dumolard : Pages Stendhaliennes Des Editions J. Rey de Grenoble B. Arthaud successeur 1928.

[3] André le Breton : Le Rouge et le Noir de Stendhal. Ed. Mellottée.

[4] Jean Prévost : La Création chez Stendhal. Ed. Mercvre de France.

#### 副論文その二 Staël 夫人と Stendhal (←)

此の研究を本紀要の第4巻第2号に発表した《Stendhal の人間像》と題した論文の〈副論文その二〉とする。従って副論文その一は《Racine et Shakespeare にみられる作者の文学観変化に就いて》である。

M<sup>me</sup> de Staël が啓蒙主義の政治理念から反 Napoléon の態度を示し、やがて、夫人の抵抗思想を Stendhal が継承すると、私は主論文で指摘しておいた。

此の両者はともに浪漫主義に属する作家であり、そして、両者の関係を論考する際にわれわれに執って最も注目を惹く事実は、浪漫主義の先駆者 J.-J. Rousseau を M<sup>me</sup> de Staël も Stendhal も意識して私淑していたと観られる共通点にあると言えよう。このような視点から M<sup>me</sup> de Staël と Stendhal が J.-J. Rousseau から如何なる影響を受けているかを、此の研究では両者の小説に対する態度に限定して考えて観たいと思う。

それで小説にテーマを限定するならばなおのこと両者の J.-J. Rousseau への傾倒が、彼等に文学を開眼させたかに見える。

M<sup>me</sup> de Staël の最初の著作らしい作品が『Rousseau 論』であることはよく知られている。夫人の22才の時であり、此の作品が父 Necher 礼讃の文意で終わっていようとも、夫人の最初の著作が Rousseau を論じたものであった



事実は特筆されよう。

一方、われわれは Stendhal が幼少の頃から Rousseau の作品を読み、精通していたことを知っている。

では一例として『Nouvelle Heloise』を両者がどのように把握していたかを少し考察してみよう。M<sup>me</sup> de Staël が『Nouvelle Heloise』を読んで全編に見られる Saint-Preux や Julie の理智と徳に惹かれることは、夫人の文学観から推測しても容易に肯定しうるところであろう。にもかかわらず、夫人が讚美したのは主人公たちの心情の全能という点にあった。

Stendhal が惹かれたのも Saint-Preux と Julie との愛であり、彼が初恋の女性 Victorine を私の Julie と秘かに呼んでいたことは彼の日記が証明している。M<sup>me</sup> de Staël は彼女流の『Nouvelle Heloise』を描いている。即ち、『Delphine』がそれである。此の小説に就いては1835年に Sainte-Beuve が『Observations sur Delphine』を書いているが、彼は Necher de Saussure 夫人の言葉として、Delphine はM<sup>me</sup> de Staël の青春に於ける現実像であると述べている。M<sup>me</sup> de Staël の『Delphine』に於ける Léonce と Delphine、それに対するに、『Nouvelle Heloise』に於ける Saint-Preux と Julie、及び、Delphine と D'Albémar に対して Julie とその従姉、さらに、Léonce とその友に対して Saint-Preux とその友、このように作中人物群の配置も類似している。

然しながら、夫人の『Delphine』は『Nouvelle Heloise』以上に読者が感銘を受けるのかと反問するとそうではない。なぜなら『Delphine』にあっては作家が感情を描きながらも、それが十分に主人公たちに息ずいていない。つまり、遊離してしまっている。そのことが読者にいっそう M<sup>me</sup> de Staël の愛、友情、及び、道徳についての講義を聞かされている思いがするのである。読者が主人公たちの運命に共感を覚えるが如き場がない。そうした読者の不満は、Sainte-Beuve が先述した『Observations sur Delphine』の中でこの小説が書簡体であることを問題としていたが、私もこの点に原因がある

と思う。手紙の本質は告白である。感情は片側通交に落ち入り易い。今一つのは信号を待たねばならぬ。連続した感情の流れはない。先述した『Rousseau 論』さえ夫人の父 Necher の政界進出のパンフレットであったと見られる程、政治に関しても文学同様、大いに意慾の旺盛なところを示した M<sup>me</sup> de Staël は哲学を知る文学者、理知を信頼する進歩主義者が社会を良導すべきであると主張する。此の信念が夫人の全著作の根本的思想と言われているが、『Delphine』もその文学的实践であろう。M<sup>me</sup> de Staël はその小説で情熱的魂を持っているひとびとが秀れていることを証明し、恥しらずな、低級な社会にかかるひとびとが交渉を持つとき、彼等が落ち入り易い危険を隈なく知らせる。ここに M<sup>me</sup> de Staël が主張した真のテーマがある。

ところで Stendhal は『Delphine』の如き小説を書いたであろうか。1805年当時の Stendhal は手当たり次第と言って良い程、読書に熱中していたが、彼の読書リストにわれわれは M<sup>me</sup> de Staël のこの『Delphine』を数える。1805年2月3日の日記に次の句が読まれる。

«D'après mes principes sur mon art, mon premier ouvrage aurait eu de grandes ressemblances avec Delphine si je n'avais pas lu ce roman dans ce moment, et peut-être en aura-t-il encore, quoique je l'aie lu.»—〔1〕

彼の『Le Rouge et le Noir』、『La Chartreuse de Parme』、及び、『Lucien Leuwen』などがそうである。M<sup>me</sup> de Staël 同様、Stendhal も確かに撰ばれたひとびとの社会との相剋を描いている。対社会とばかりでなく、彼の作中人物たちは個人的にも自己の心情と葛藤していると言えよう。

F. M. Albérès は Delphine と Fabrice を次の如く論じている。

«…Si le personnage de Delphine est statique et conventionnel, Fabrice est vivant et naturel; il n'est pas l'illustration d'une théorie, il est Beyle lui-même.

Car Fabrice a pu seulement être créée parce que Stendhal avait conquis auparavant dans la vie, et grâce à l'expérience, son naturel sensible, alors

que Delphine n'est qu'une construction théorique de Madame de Staël à partir de ce naturel sensible qu'elle possédait par ailleurs peut-être plus spontanément que Stendhal.》—〔2〕

F. M. Albérès は以上の如く両者の小説を比較しつつ二人の作家をも論考しているのであるが、私の観るところ F. M. Albérès は Stendhal の〈Moi romantique〉が彼の生活での体験で獲得されたものであると看做すならば、彼がその〈Moi romantique〉と対比する Stendhal の〈Moi idéologique〉が生れつきの、換言すれば、先天的本性であると看做しているものであろうかしかし、彼のかかる Stendhal 観はむしろ逆であるように私は思う。それで、主論文で扱った主題がかかる Stendhal 観の是正であったことはすでに読まれた通りである。

引用文の原典、及び、その頁。

〔1〕 Stendhal : Œuvres intimes. Ed. Pléiade P. 611.

〔2〕 F. M. Albérès : Le Naturel chez Stendhal. Ed. Nizet p. 196.